配慮表現と動作のコントロール性

牧原 功（群馬大学）

要 旨

日本語の配慮表現に関わる文法カテゴリーは多岐に渡っている。本稿では動詞の自他の選択が配慮慮表として機能する場合があることを提案し、その習得が日本語学習者にとって困難であることを示す。また、日本語母語話者と日本語学習者の動詞の自他の選択結果を比較することによって、日本語学習者がどのような点に注意する必要があるのかを明らかにし、今後、日本語研究・日本語教育において留意すべき点を指摘する。

キーワード：配慮表現　自動詞　他動詞　動作のコントロール性

1. はじめに

1.1. 配慮表現について

山岡他（2010）の定義に従い、本稿では配慮表現を以下のように定義する。

> 対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられる言語表現

Brown & Levinson (1987)（以下、B&L）では、ポライトネス(politeness)を他者との人間関係に関わる基本的欲求（フェイス）を脅かす行為(face- threatening act: FTA)を回避するための言語行動としている。本稿では、FTA を回避するために選択される言語表現を配慮表現とし、FTA をむしろ増大するような表現を負の配慮表現と呼ぶこととする。

1.2. 配慮表現と動詞の自他の問題

配慮表現に関わる言語形式は多岐に渡る。文末の蓋然性や策動制に関わるモダリティ形式はもちろん、終助詞、副詞、テンス・アスペクト、ボイスなども配慮表現として機能する(1)。

本稿では、日本語において配慮表現として機能する文法カテゴリーの１つに動詞の自他の選択があることを示し、日本語母語話者がどのようにそれを使用しているのかを明らかにし、日本語学習者にとってその習得のどのような部分が困難であることを示すことを目的とする。そして、動詞の自他の選択が、動作のコントロール性への言及という原因で配慮表現として機能することを主張する。

例えば、中国人学習者にとって動詞の自他の習得は決して容易ではないという(2)。その中でも、よく間違えてしまう用法として以下のようなものがある。

（1）（友人から借りたラジカセを不適切な操作で壊してしまった時の表現）

すみません、お借りしていたラジカセが壊れてしまって・・・

これは初級レベルの学習者に見られるものではなく、上級レベルの学習者であっても頻繁に使用する例だと言う。日本人であれば、以下のように他動詞を用いるはずである。

(2) すみません、お借りしていたラジカセを壊してしまって・・・

このような、動詞の自他の使用は、一見すると、他動詞を用いると自身の責任を明示し、それによって丁寧な表現となり、自動詞を用いると無責任な印象を与えるというような、非常に簡潔な規則に従っているように思われる。しかし、実際には、自分に責任があるとは考えられない場合でも「お借りしていたラジカセ、壊してしまったみたいなんです。」のようにあえて他動詞を用いる場合があり、また、以下のように、複数の出来事、動作を含む文の場合、どの部分を他動詞にすればよいのかというような問題もある。

(3) コップを落として割ってしまったんです。

(4) コップを落として割れてしまったんです。

(5) コップが落ちて割れてしまったんです。

さらに、実際の発話では、発話の相手との待遇的な関係によって、自動詞を用いる場合も他動詞を用いる場合もありそうである。

本稿ではこれらの点について考察を行いたい。

2. 配慮表現としての動詞の自他の使い分けの問題

2.1. 先行研究や日本語教科書での言及

動詞の自他と丁寧さとの関係についてはこれまでにもいくつかの論文において指摘されている。ここでは、それらのうちの主要なものを取り上げて先行研究での扱いについて概観する。

2.1.1. 守屋(1994)

先行研究の中で、最も早くこの現象に言及したのは、守屋(1994)である。守屋は日本語学習者の日本語の動詞の自他の習得状況を調べるための調査を行った。調査は、(6) のような例文を使い、[ ]の中の助詞のどちらかに○をつけ、適切な動詞を選ぶ（両方選んでも可）というものである。

(6) ドア[を/が]風でバタンと(閉めた/閉まった)

この調査結果において、「さいふをおとしてしまってね」と「さいふがおちてしまってね」の選択で後者を選んだ者は中国語母語話者に比較的多く見られる傾向があるが、「どうしてそんなによごしてしまったの」と「どうしてそんなによごれてしまったの」の選択では、後者を選んだ者は、母語に関わらず、より自然と考えられる「どうしてそんなによごしてしまったの」よりも多いという結果が得られている。守屋の論文における、それぞれの例文での選択結果を以下に示す。

＜表１＞ 動詞の自他対応の選択結果　守屋（1994）より

	中国語系	韓国語系	英語系
さいふをおとしてしまってね	37	47	10
さいふがおちてしまってね	14	1	7
どうしてそんなによごしてしまったの	16	15	8
どうしてそんなによごれてしまったの	44	34	13

守屋は、上記の選択結果をもとに、日本語学習者の動詞の自他の使い分けの習得において困難度の高いものとして、「イベントが非意図的に成立した場合でも、主体のテリトリー、責任の範囲でおきた場合は、他動詞を用いることがある」とした。そして、「動詞の自他の選択のむずかしさは、程度の差はあれ、自動詞選択のむずかしさにある」とし、「他動詞選択条件として習得の困難なもの」として「イベントが非意図的に成立した場合でも、主体のテリトリー、責任の範囲でおきた場合は、他動詞を用いることがある。」と主張している。

本稿でも基本的には同様の立場に立つものであるが、主体のテリトリーとは何か、責任の範囲とはどのようなものか、また文章において、どの部分にまで他動詞を用いる必要があるのかといった点については、守屋（1994）では考察の対象外であり、本稿ではこれらの点について考察を試みることとする。

2.1.2. 伊藤(2012a)

伊藤は、一連の研究において、日本語学習者の自他対応のある動詞の選択の問題点について検討している。伊藤（2012a）は、中国語母語話者の例文をもとに、動詞の自他の使用を、形態論的なもの、意味論的なもの、語用論的なもののレベルに分けて考察した。

伊藤は、学習者の自他の使い分けの習得段階を、形態論レベル→意味論レベル→語用論レベルと進んでいくと仮定し、語用論レベルでの誤用の具体例として、介在性の他動詞文、状態変化主体の他動詞文、授受表現、責任の有無の表明を挙げている[3]。

このうちの、責任の有無の表明に関わる例文としては以下がある。「借りた車を事故で壊した」という状況で持ち主に自分自身に非がないことを伝える不適切な会話をしているものである。

（7）　わたしがー、大丈夫ですけど、〈ええ〉車はちょっと、壊されました【壊してしまいました／壊れてしまいました】

上記の例文は、実際には「私は車を壊された」という間接受身形を用いることで被害を受けたことをより強調する文となっているとしている。この点は妥当な分析であると考える。ただし、適切な例文として示した【　】内の表現形のどちらも本当に許容されるのかということにはやや疑問が残る。個人的な言語直感による判断ではあるが、借りた車を事故で壊したという状況であれば、「車がちょっと壊れてしまいました」という自動詞を用いた文は適切性に欠けると思われる。

このような点に留意しつつ、詳細な検討を行う必要があると考える。

2.1.3.『総合日語』第三冊 改訂版（北京大学出版社　2010年）

次に、教科書での言及についても見ておきたい。北京大学出版社発行の『総合日語』(2010)では、行為者に責任があるかどうかを自他で表し分けるとし、以下のような例を挙げてい

る。

(8)「あ、割っちゃった」

「あらあら、割れちゃったのね。」

そして、「ミスの責任が話し手側にあるとはっきり指す場合、スル表現を使う。次の用例はスル表現が使われているが、故意にやったことではなく、不注意で犯してしまったミスであるが、スル表現を使う」としている。

(9)割っちゃった！

そして「責任回避あるいは、他人の責任を指すのを避ける場合、ナル表現が使われる。」として

(10)あらあら、割れちゃったのね。

という用例を示している。

2.1.4.『標準日本語　高級編』(人民教育出版社・光村図書　2012)

人民教育出版社・光村図書による『標準日本語　高級編』には本稿の著者である牧原も関わっており、文法項目の解説部分を執筆している。この教科書の中では、動詞の自他の選択と責任の有無の表し方について、「中国語母語話者は、自分の責任で壊してしまった場合でも自動詞を用いてしまう傾向があり注意する必要がある。」として、以下の例が挙げられている。

(11)お借りしていた時計が壊れてしまって、申し訳ありません。

(12)お借りしていた時計を壊してしまって、申し訳ありません。

3. 日本語母語話者と日本語学習者の使用状況

以上のような先行研究によって指摘されていることは、「イベントの意図性」「責任の有無の表明」といったものである。本稿でもこの点には同意する。しかし、それらイベントの意図性や、責任の有無の表明を、日本語母語話者はどのような状況で行っているのかをもう一度検討しておく必要があると考える。そこで、以下では、まず日本語母語話者がどのように動詞の自他の選択を行っているのかについての調査結果を提示し、合わせて日本語学習者の使用例を示す。それらの結果をもとに、日本語母語話者と日本語学習者との間で動詞の自他の使用の在り方がどのように異なるのかを検討する。

3.1. 調査方法、調査対象

本研究では《謝罪》という発話行為に限定して調査を行った。《謝罪》に限定したのは、より高いポライトネスを示す必要が生じるため、配慮表現としての動詞の自他の用法の違いが明確に現れると判断したためである。

調査方法は、有対の自動詞・他動詞を用いたいくつかの例文を作成し、それを日本語母語話者と日本語学習者とに提示して、どちらがより自然な表現と感じられるかを調べるというものであった。まず、選択式のアンケートで質問し、後に対面でインタビューを実施した。

本調査は、パイロット調査的な意味合いが強く、調査対象とした日本語母語話者は群馬大学及び群馬県立女子大学の2年生～3年生8名、日本語学習者は群馬大学の交換留学生

7名で、日本語能力はJLPTのN1受験レベルと考えられる者であった。

3.2.調査内容

日本語母語話者に対する調査の目的は、どのような相手に対する発話であるかによって、動詞の自他の選択に差異が生じるのか明らかにすること、一つの文の中に複数の動詞がある場合、どの動詞を他動詞にするのかを調べるというものである。

調査で用いた例文は、上記の点を明らかにできるよう、部分的な対立を含む構成とした。以下に、調査で用いた例文を示す。

【質問】

以下のような行為に対して謝罪を行いたいと考えています。状況を説明する時にどのような発話をしますか？普段使用すると思うものを選んでください（どちらも同程度に使用するという場合は、複数を選んでも構いません）。提示されている言い方以外を使う場合は、後で説明してください。

Q1　友人に借りていたCDが見つかりません。友人に事情を説明します。

A ごめんね、この間借りたCD、なくなっちゃったみたいなんだよね。

B ごめんね、この間借りたCD、なくしちゃったみたいなんだよね。

Q2　友人に借りていた本にコーヒーのシミを付けてしまいました。友人に事情を説明します。

A ごめんね。この間借りた本、汚れちゃったんだよね。

B ごめんね。この間借りた本、汚しちゃったんだよね。

Q3　先生に借りていた本にコーヒーのシミを付けてしまいました。先生に事情を説明します。

A 申し訳ありません。この間お借りした本が汚れてしまいました。

B 申し訳ありません。この間お借りした本を汚してしまいました。

Q4　友人から借りていた電子辞書が壊れたようです。理由はわかりません。友人に事情を説明します。

A 借りてた電子辞書、壊れちゃったみたいなんだけど・・・

B 借りてた電子辞書、壊しちゃったかもしれないんだけど・・・

Q5　先生から借りていた電子辞書が壊れたようです。理由はわかりません。先生に事情を説明します。

A お借りしていた電子辞書、壊れてしまったようなのですが・・・

B お借りしていた電子辞書、壊してしまったかもしれないのですが・・・

Q6(4)小学生が学校でキャッチボールをして遊んでいるときに、ボールが窓にぶつかりました。そして窓が割れました。学校の先生に事情を説明します。注3)

A キャッチボールをしていたら、ボールが窓にぶつかって、窓が割れてしまったんです。

B キャッチボールをしていたら、ボールが窓にぶつかって、窓を割ってしまったんです。

C キャッチボールをしていたら、ボールを窓にぶつけて、窓を割ってしまったんです。

Q7 家の前の路地でキャッチボールをして遊んでいるときに、ボールが隣の家の窓にぶつかりました。そして窓が割れました。隣家の人に事情を説明します。

A キャッチボールをしていたら、ボールが窓にぶつかって、窓が割れてしまったんです。

B キャッチボールをしていたら、ボールが窓にぶつかって、窓を割ってしまったんです。

C キャッチボールをしていたら、ボールを窓にぶつけて、窓を割ってしまったんです。

Q8 大学の食堂でパーディーをしているときに、不注意でテーブルにぶつかりました。コップが床に落ちました。そして割れました。お店の人に事情を説明します。

「テーブルにぶつかって、＿＿＿＿＿＿＿＿」

A コップが落ちて、割れてしまったんですが、

B コップを落として、(コップが) 割れてしまったんですが、

C コップを落として、割ってしまったんですが、

Q9 友達が茶道をやっています。気に入っているという黒楽茶碗が置いてあるテーブルに不注意でぶつかりました。茶碗が床に落ちました。そして割れました。友人に事情を説明します。

「テーブルにぶつかって、＿＿＿＿＿＿＿＿」

A 茶碗が落ちて、割れてしまったんですが、

B 茶碗を落として、(茶碗が) 割れてしまったんですが、

C 茶碗を落として、割ってしまったんですが、

3.3. 日本語母語話者の調査結果と考察

調査結果を以下に示す。

<表 2> 日本語母語話者の回答

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
A	4	0	0	7	3	6	1	1	1
B	6	6	8	1	6	4	7	4	2
C						0	2	3	5

この調査結果からわかることは以下となる。

1. 意志的に行為をした場合でなくても他動詞文を用い、文末にその行為を望んで行ったのではないことを示す「てしまう」や、「みたい」を用いる形が用いられる場合が多い。
2. 相手との待遇関係によって、自動詞・他動詞のどちらを選択するかが異なる。相手に対してより高いポライトネスが必要と感じられる場合は、他動詞を用いる傾向がある。
   2-1. 相手が待遇的に高い立場の場合、他動詞を用いる傾向がある。
   2-2. 破損するなどした対象物が所有者にとってどのような価値のものであるかによって、自動詞・他動詞の用い方が異なる。対象物の価値が高いほど、他動詞を用いる傾向がある。
3. 日本語の自動詞・他動詞はポライトネスに関わる表現として選択される場合があり、他動詞の使用は配慮表現の一種と見なすことができる。
4. 「ボールがぶつかって窓を割ってしまった」のように、複数の動作が連続する場合、対象物に影響を与える動作側を他動詞化し、対象物に影響を与える動作を引き起こした動作については、自動詞を用いることが多い。最終的な対象物の変化を表す部分は自動詞を用いる場合も多い。

   (Q6、Q7 に「キャッチボールをしていたら、ボールを窓にぶつけて、窓が割れてしまったんです。」という選択肢があった場合、結果が変わった可能性もある。)

   ポライトネスを高める場合、話者の動作のコントロール性に対する言及は、対象物に直接的に影響を与える動作にまず行う必要があり、待遇性、所有性などの諸条件によって必要と判断された場合は、それ以外の動作にも拡大して用いられる傾向がある。
5. 日本語では、他動詞の使用が、意志性の有無により選択されるものではなく、ある事象が動作主のコントロール可能な状況にあったと認識するか否かによっている可能性がある。例えば以下のような例を参照されたい。

   (13)皿をたたきつけて割った。

   (14)皿を不注意で落として割った。

   例文(13)と比較して、例文(14)では、「不注意で」とあるので話者が意志的な動作をしたわけではないことは明示されている。にも関わらず他動詞を用いているというのは、意志性の有無で選択が行われるということではないことを示すものであると言える。話者は、自分が事象をコントロール可能な状況において、好ましくない事態を生じさせたということを他動詞を用いることで示しており、それによって、動作主の出現した事象への責任が含意されることになるのだと考えられる。

3.4. 日本語学習者の調査結果と考察

日本語学習者への調査は、群馬大学の交換留学生を対象として実施した。対象は日本での生活が半年以下の学生7名である。日本語能力はJLPTのN1受験レベルであり、国籍は、中国3、台湾1、スペイン1、ハンガリー1、スロベニア1となっている。

調査結果を以下に示す。

＜表3＞ 日本語学習者の回答

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
A	7	7	6	7	6	6	6	6	5
B	0	1(C)	1(C)	0	1(C)	1(C)	1(C)	1(C)	2(C,T)
C						0	0	0	0

※ Cは中国人学習者、Tは台湾人学習者である

これらの結果から、以下の点が観察される。

1. 上級レベルと考えられる日本語学習者でも、配慮表現としての動詞の自他の使い分けは十分に理解されていない。
2. 母語での表現において、動詞の自他がポライトネスと関係があるという場合でも、そのような現象に対する自覚が薄いため、日本語に応用できない。
3. 日本語学習者の自動詞の使用は、無標の中立的な意味での使用ということにはならず、負の配慮表現となってしまう場合が多い。
4. 動詞の自他の選択が適切でないのは中国語母語話者に限らない。中国語母語話者以外の学習者も、日本語母語話者のように配慮表現として使用することは困難である。
5. 動作のコントロール性とポライトネスとの関係は動詞の自他以外でも広汎に観察される可能性がある。

このうち、4についてもう少し検討してみたい。動作主が動作や状況をコントロール可能な状態で、話者が好ましいと考えない事象が生じた場合、動作のコントロール性をより大きく表現した方が、ポライトネスが高くなる傾向が見られる。そして、それに反して、動作主のコントロール可能な状況で、話者が好ましいと考える事象を生じさせた場合（例えば自己賞賛など）は、可能表現などを用いて動作のコントロール性をより小さく表現した方がポライトネスが高まるという現象が観察される。

(15)大学に入学してから4年間、ずっと成績優秀学生として表彰されました。

(16)大学に入学してから4年間、すっと成績優秀学生として表彰されることができました。

(16)で用いられているようなタイプの可能表現は、日本語学習者の作文においてはかなり上級の学習者でも自在に使用できるという性質のものではなく、(15)のような文を産出してしまうことが多い。可能表現には、自己の行為としてではなく、自己の意志的な行為からは離れた単なる事象として表示する機能があるように思われる。

本稿では動詞の自他について考察を行ったが、可能形の使用についても詳細に検討すべ

き点は多いだろう。

4. おわりに

以上、日本語母語話者と日本語学習者との、《謝罪》を行う場合での動詞の自他の使用の在り方について検討を行った。そこから明らかになったことは既に述べた通りであるが、日本語学習者が、母語話者が他動詞を用いる場面で自動詞を用いる傾向が高いという点については、今後日本語教育において十分に配慮する必要があろう。日本語学習者の自動詞の使用は、単純に配慮表現を使用しないということではなく、負の配慮表現を用いてしまうということになるからである。また、動詞の自他の選択が配慮表現として機能するということからもわかるように、配慮表現に関わる文法カテゴリーは広汎である。今後、さらに、語用論・ポライトネス・配慮表現といった視点から、それらに関わる文法項目を精査し整理していく必要があるだろう。そして、その成果を日本語教育に活かしていく場合、他動詞が配慮表現として用いられるということに言及するだけではなく、例えば「壊してしまったみたいなんです」のような「他動詞＋みたい/ようだ/かもしれない」といった表現をコロケーションとして扱っていくという姿勢も重要である。

また、教授者・学習者ともに、文法的に正確な文章を産出することのみにとらわれず、文の語用論的な正確さにも留意する必要がある。本稿で触れた、動詞の自他、可能形の使用もそうであるが、初級で学習する文法項目の中には、配慮表現として用いられるものも多く、教授者、学習者ともに、その適切な運用が可能となるよう配慮する必要がある。これまで、文法カテゴリー毎に考察されていた現象が、何らかの原理によって、カテゴリーを横断するように考察の対象とされていく必要があると考える。

注

(1) 牧原(2012)を参照されたい。

(2) 神戸大学の朱春躍氏の指摘による。

(3) 他動詞文が語用論的に使用されるという指摘はあるが、具体的な例は提示されていない。

(4) 創価大学の山岡政紀氏から、Q6 と Q7 において、「キャッチボールをしていたら、ボールを窓にぶつけて、窓が割れてしまったんです。」という選択肢を入れるべきではないかとのご指摘をいただいた。次回、再度調査を行う際に対応したい。

参考文献

伊藤秀明 (2012a)「学習者は『対のある自他動詞』をどのように使っているか―中国人日本語学習者の中級から超級に注目して―」『国際日本研究』第 4 号　筑波大学

―――― (2012b)「相対自動詞・他動詞選択判断の要因―中国人大学生の場合―」『国際交流基金日本語教育紀要』第 8 号　国際交流基金

小野正樹 (2011)「日本語引用表現の分類試案」『日本語コミュニケーション研究論集』第 1 号 日本語コミュニケーション研究会

小野正樹・李奇楠・金玉任・ショリナダリヤグル・牧原功 (2011)「日本語・中国語・ロシア語・韓国語・カザフ語の引用表現に関する対照研究」『日本語コミュニケーション研究論集』第

1号 日本語コミュニケーション研究会
佐藤琢三 (1994)「動詞の自他対応と様態指定」『筑波応用言語学研究』1
_____ (2007)『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院
杉村 泰・建石始・庵功雄・稲垣俊史 (2009)「中国語母語話者による日本語動詞の自他の習得」『2009年度日本語教育学会秋季大会予稿集』
仁田義雄編 (1991)『日本語のヴォイスと多動性』くろしお出版
姫野伴子 (1992)「負担と利益」『埼玉大学紀要人文科学編』第41巻 埼玉大学教養部
牧原功 (2002)「テンス・アスペクトの情報伝達機能」『群馬大学留学生センター論集』第2号
_____ (2012)「日本語の配慮表現に関わる文法カテゴリー」『群馬大学国際教育・研究センター論集』第11号
水谷修 (2008)「日本語教育を合目的化・効率化するための新しい研究方法」『日本語教育世界大会2008予稿集1』
守屋三千代 (1994)「日本語の自動詞・他動詞の選択条件－習得状況の分析を参考に－」『講座日本語教育』第29分冊、早稲田大学日本語教育センター
山岡政紀 (2004)「日本語における配慮表現研究の現状」『日本語日本文学』第14号 創価大学日本語日本文学会
山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010)『コミュニケーションと配慮表現』明治書院
張瑜 (2012)『日本語と中国語のヴォイスにおける“責任遡求”に関する研究』山口大学東アジア研究科博士論文
Brown, P. and S. Levinson (1987) *Politeness*: Some universals in language usage, Cambridge University Press.
Hopper, Paul J, & Sandra A, Thompson. (1980) *Transitivity in grammar and discourse*. Language.
Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman.（邦訳：池上嘉彦・河上誓作訳 (1987)『語用論』紀伊国屋書店）

参考資料

『総合日語』第三冊 改訂版 (2012) 北京大学出版社
『標準日本語 高級編』(2012) 人民教育出版社・光村図書

（牧原功、群馬大学国際教育・研究センター准教授、makihara@gunma-u.ac.jp）